

「あいち花と緑を活かした健康増進地域づくりフォーラム」設立準備会
第3回勉強会

1 実施日 平成18年3月10日（金） 13:30～16:00

2 会場 あいちNPO交流プラザ 会議室A

3 内容

(1) 問題提起

講師&コーディネーター：名古屋産業大学学長 伊藤達雄氏

- ・今日のテーマは「花と緑の地域づくりにおける行政と市民の協働のあり方」とし、官と民のコラボレーションの事例を勉強させていただく。
- ・先日、愛知県、三重県、岐阜県、名古屋市の担当を交えたある会合で景観を今後どうするかを議論した。欧州に行かれたことのある方から「欧州の街は非常にきれいである。それに対し日本は…」という話をよく聞く。愛知県の担当は美しい街をつくっていくのがこれからのテーマだと言っていた。
- ・美しい街とは何かという議論になったが、ひとつ言えるのは美しい街に住んでいるということは、こころが健康になるということである。その意味で美しい街というのはわれわれがやろうとしている勉強とたいへん関係があるように感じた。
- ・今日は美浜町と知多市の事例を勉強するが、看板や展示物を何とかしろという名古屋の都会の景観ともまた違った問題がある。ヨーロッパの田舎に行くと花や緑が飾ってあってコンクリート剥き出しの街にはない魅力があるが、花と緑を活かしてどんなふうに街がつくられていくのか、これは行政と民のコラボレーションである。まさにコラボレーションがないと街づくりはできない。その意味でいろいろなチャンネルにつながっているわれわれの勉強会であるが、今日は第3回目、前回以上に有益な時間を過ごしたいと思うし、ディスカッションの時間やみなさんにそれぞれ発言していただく時間をもうけたいので宜しくお願いしたい。



(2) 報告1 「第5回全国ガーデニングサミット in 愛知美浜」

報告者：美浜町建設部都市計画課主査 小島 康資氏
ボランティア 猪口 照彦氏、高浪 保枝氏

(小島主査)

- ・全国ガーデニングサミットは、ガーデニングや花をテーマに、まちづくり、村づくりを進めている地域が情報交換等を通じて親睦・交流を深め地域の活性化を図ることをめざし、日本という島を大きな庭園に見立てガーデンアイランドという世界に誇れる地域づくり、国づくりに向けて賛同した全国の10市町で組織している。昨年、美浜町で5回目が開催された。
- ・美浜町で開催するにあたり、花でのおもてなしをどういう形で実施していくかについて行政サイドの検討だけでは限度があるので民の力も借りるため町の広報誌で募集をかけた。趣旨に賛同し、一緒に花づくり、地域づくりをやらないか呼びかけたところ、70名ほどの参加をいただいた。この方たちを中心に実行委員会を立ち上げた。これは住民、各区の代表、各種団体、町の担当部局および商工観光課、農業水産課など関係各課により組織された。
- ・9月17、18日の本番に向け幾度か会議を行った。当日は天候にも恵まれ、無事成功することができた。基調講演として、NHK「趣味の園芸」のメイン司会である柳生真吾氏を招き講演いただいたが、ネームバリューもあり申し込みが殺到し先着順で対応した。休憩時には地元健康づくり食生活改善協議会等によるおもてなしとしてハーブティー、ハーブクッキーなどを提供した。また事例発表として花と緑の区市町村議会議員連盟幹事の桂川孝裕氏に報告いただいた。
- ・その後、交歓交流会を実施したが、会場飾り付けはオープンガーデン知多半島の協力のもと、美浜町から連想するものとしての海、そこからさらに「我は海の子」の一節「苦屋」をイメージしてつくられた。会場中央の飾り付けは炭焼研究会のみなさんによる竹ドームを制作した。
- ・こうした飾り付けをするにあたり花の苗が必要になってくる。そこで今回参加いただいている猪口氏に協力いただいたが、ボランティアでもあり生産農家の代表でもあり、実際に花の苗をつくっていただいている。そのあたりの話を猪口氏からしていただく。

(猪口氏)

- ・本業は野間で花苗の生産をしている。美浜町からガーデニングサミットの話聞いた時、これはいいことだと即賛同した。ただ、町の花弁園芸の組合で組織としてやろうとした時にみな尻込みしてしまったため、ひとりでやらざるを得ず残念であった。
- ・最初、町からハンギングバスケット協会に話がっていて、その協会の中の方とつながりがありお誘いいただいた。会議には参加していないが、苗の生産と飾り付けの助手をやらせていただいた。
- ・サミット会場飾り付けの植え込み作業を担当し、ボランティアの方にやっていただいた。多数の方が参加され和気あいあいと楽しく作業ができた。若い人もいたが、やはり中高年層が多く、見ず知らずの方同士で楽しそうに話をしながら作業をされている姿をみて、いいことだと感じた。
- ・ハンギングバスケットコンテストでは、カブスカウトの副長をやっていたので子どもたちにやらせるよう提案した。小さい頃から花に触れるのはいいことだと常々思っていた。自分の好きなものを持ってきて植えてみなさいと指示しただけでハウス中が活気に満ちあふれ、なかなかいいものも出来て、子どもたちの個性に感心した。
- ・美浜町に全国の人が来てくれるという喜び、それをどう伝えられるかが考えとしてあった。やはりみんなを迎えなければならぬという助言もあって、カブスカウトの少年にも手伝ってくれるよう頼んで会場入口の受付付近で資料を配付したりしたが、わ

いわいがやがやと市内の人や他地方の人も来てくれ、「君たちよくやってくれたね」と絶賛を受けたので、自分の気持ちが素直に伝わったのだなと思った。

(小島主査)

- ・ガーデニングコンテストには、カブスカウトのほか、半田農業高校の生徒の方々もサミットに是非関わりたいという要望があり参加いただいた。コンテストのほか玄関入口脇に花壇の飾り付けもしていただいた。そういう意味で住民、子どもたちを巻き込んだなかでのサミットであった。
- ・また美浜緑苑オープンガーデンを実施した。美浜緑苑は86年に文化の薫るところはるの郷として地区計画がつけられ、塀は生け垣、フェンス、四つ目垣、コンクリートブロックの高さ制限などをもうけた。そのため庭など人目を引く開放部分が多くなり、自然に花や木を植えたり庭づくりをするようになっていった。隣人から声をかけられ、自分も花づくりをやるようになり、それがどんどん広がっていった。美浜緑苑のまちづくりが出来た。世帯数470軒のうち23軒を選び、写真を撮らせてもらいパンフレットをつくって、当日、庭園を開放したが、多くの方々に訪れていただいた。
- ・会場では物産展も開催した。40テントほど用意したが、天候がよいこともあって品物も1時間ほどで売れてしまった。
- ・また、地元の区の下部組織として、まちづくり委員会がある。通学路の花壇づくり、子どもたちへの参加呼びかけ、ごみ集積所の清掃活動などさまざまな活動をしている。資料のフラワータウン美浜花畑づくり取り組み一覧にあるとおり、各地区で取り組んでいただいている。その中のお一方である高浪氏からもお話いただく。

(高浪氏)

- ・上野間鶴の里クラブに所属している。メンバーは8名おり、実際に平日稼働できるのは主婦4名である。無理のない活動とし、各担当部門も決めてある。
- ・もともと退職後、何か出来ることをさがしていた時に、長年名鉄を利用していたこともあり駅の雑草が気になっていたのも、名鉄と交渉し、2、3年後にサミットもくるし、土地をお借りできないかと持ちかけたが、すぐには返事をもらえなかった。その後、使ってもらえるのはいいが、木を植えるとすぐに撤去できないし花程度であればいいということで借りた。
- ・土地は500坪程度あったが、全部は大変なので人が通る道路沿いの部分を借りた。石や雑草がひどく、地元の人に相談して耕耘機を借りるなど、とにかく畑になるまでに大変な苦勞をした。予算もないし、ボランティアとして立ち上がったものなので、各自持っている花を植えたりとかあちこちで花の苗の残ったものを集めたりして何とか畑になったと思えたのが、サミットが行われた17年の夏であった。ただ、水だけは自由に使ってくださいということで水かけには経費もかからず、名鉄にはとても感謝している。
- ・駅前で作業をしているが、花を触っていると興味を持っている方が結構寄ってきてくれる。最近、駅がきれいになったと言ってくれたり、空港への行き方を聞かれるなど観光案内をしているような時もあるが、花を触っているだけでなく各地から見える人たちと会話ができることはとても良いことだと思う。また、植えてあるハーブをほしいと言われる方もおり持ち帰っていただくこともある。このように花づくりというのは人と人とのふれあいができるものであり、とても嬉しく思っている。
- ・サミットが終わった後、一時は花づくりもどうかなとは思っていたが、他のメンバーに続けるか聞いたところ、せつかく今までやってきたし地域の方が喜んでくれることだから自分たちで続けられる限りはやりましょう、ということになった。メンバーは年に数回お話をもうけて次はどんな花を植えようかという計画をつくり、みなで和

気藨々とやらせてもらっている。美浜町は美しい町というモットーがあるし、出来る限り続けていきたいと思っている。

(小島主査)

- ・これらの活動を受けて、行政として今後どういう活動および推進をしていくかということ、2月の実行委員会において話し合った。活動を一過性のもので終わせることなく、やはり継続することに意義がある。継続の方法は、せっかくボランティアの方々が育ってきているし、興味をもって参加される方も増えているので、そうしたことを踏まえて、18年度以降はボランティアやリーダーの育成などの人づくり、自立した活動を支えるための住民主導型の組織づくりをしていきたい。
- ・モデル地区づくり、住民参加による花のまちづくりであるが、美浜緑苑のようなモデル地区をつくるとうちでもやれないか、行政はどこまで協力してくれるのか、という質問が出てくる。出せる範囲では出すが、限りがある財源なので、出来るだけみなさんにやっていただく。行政主導になるとどうしても限度があり途中で終わってしまうので、いかにお金をかけずにやっていくかということになる。
- ・方法としては、オープンガーデンが一番手っ取り早いかと考えている。現在は美浜緑苑だけであるが全町的に広げていくことも含めて、18年度以降、現在の実行委員会を解散してあらたに推進委員会を立ち上げ進めていきたい。こちらはボランティアの代表、地元の生産農家、各種団体の方々と組織し、その下部組織として作業部会にあたる委員会をつくって実際に動いていただける方、たとえば水かけ、花壇づくりなどに協力していただける方に委員になっていただき、花づくり、まちづくりを推進していきたいと思っている。
- ・今回のサミットにより、美浜町ではボランティアの方の気持ち盛り上がり協力していただける体制ができたので、これを今後は大事にしていきたいと思っている。

・名古屋産業大学 伊藤学長

行政の出来ることと民の出来ることは異なる。民にも、花卉を育て、これを生業にしている農家の方、労働力を提供される方と2種類ある。それにはお金がかかる。お金がないとやりたくても出来ない。農家もただで花の苗だけくれといわれても出来ない。そういう点で行政が市民の了解を得ながら予算化していくということがないといけない。サミットのような全国的なイベントを誘致することにより予算化が可能になる。そこにもともと花卉の園芸農家がいる、その生産品を市民と一緒に飾り付けていくという、なかなかいいコラボレーションだと思うが、お金に関する面についても参考までに伺いたい。

・美浜町建設部都市計画課 小島主査

全体的な予算の中で3分の1が花苗、機材管理、あとの3分の2はレンタル、講師料関係である。花苗についていえば、波をイメージした花の飾り付けでは表面だけで1万株、花タワーでも600株ほど使っている。やはり園芸農家、生産農家の方々の協力なくしては出来ない。これだけの数を9月のサミットにあわせてつくっていただいたが、本来ならば出荷する時期ではない暑い時期で大変な苦労だったと聞いている。実は、美浜町では花苗をつくっている方は2名だけであり、あとは観葉植物が中心である。その2名の方に話をもっていったが、1人はそれだけの数をその時期に間に合わせることはとても出来ないと断られた。もう1人の方がここにいる猪口氏で一手に引き受けていただいた。お金の話が出たが、原価に近い、あるいは原価割れしているものもあるかと思うが、そういった意味で協力していただいている。

(3) 報告2

講師：知多市建設部緑と花の推進課課長 加藤 道穂氏

- ・資料にもとづき知多市の概要紹介。
- ・人口は84,888人、世帯数は30,780世帯。
- ・位置は知多半島の北西部、北は東海市、東は東浦町、阿久比町、南は常滑市、西は伊勢湾に面している。面積は45.43km²、東西9.4km、南北8.7km。
- ・市庁舎は市域の北に位置し、名鉄常滑線朝倉駅、西知多産業道路朝倉ICに近接。
- ・産業は、臨海部は名古屋南部臨海工業地帯として火力発電、石油精製、都市ガス供給、造船などの企業が操業。内陸部は野菜、米、みかんなどの農業が盛ん。
- ・内陸部に丘陵地が多く、住宅都市整備公団による朝倉団地の整備、土地区画整理事業による宅地造成などがされてきた住宅都市である。S45年には39,834人であったが、H8年には8万人と人口が急増した。名古屋市のベッドタウンとして栄えているが、もうひとつは近隣市町の大企業向けの住宅ということでも発展してきた。
- ・もともとS33年に3町が合併して出来たため、町並みも旧町ごとに形成されている。特に東部地区は市中心部から離れ丘陵地で遮断されていたため住民の意識も名古屋や半田圏に向いている。
- ・S46年に総合計画を策定し、都市像を「明るくすみよい緑園都市」と定めた。当時の市長が緑に深い関心があり、自ら先頭に立って活動していた。
- ・基本理念として「快適 ふれあいのある都市空間の創造」を掲げ、緑を生かしたふれあいの空間、機能的な人にやさしい都市基盤、快適な住環境、積極的な緑化推進を図った。たとえば臨海部の工業地帯と内陸部の境には幅100mのグリーンベルトが設けられている。公害問題もあったと思うが、当時の市長の強い熱意があって実現した。
- ・H13年には第4次総合計画として「みんなで創るあすのちた 夢がふくらむ緑園都市」という都市像を掲げ、緑園都市を現在も継承している。
- ・緑化推進行動計画として5つの基本計画を策定した。緑を育てる人づくり、緑とかかわる機会づくり、緑の活動の拠点づくり、公共空間の緑化、民有地の緑化を掲げ、緑化推進事業を現在も進めている。
- ・緑化施策についてであるが、知多市の特徴は花苗の直生産の場であるほ場を市で持っていることである。以前は他の自治体でも見られたが現在ではほとんどみられない。ハジカミほ場といい、面積8,124m²、倉庫兼管理室、温室、生け垣・樹木の見本園、育苗ほ場、老人福祉センター駐車場なども含まれる。
- ・スタッフは、臨時職員4名、繁忙期の臨時職員2名、シルバー人材センター5名でほ場の管理をしている。市の担当は2名で必要な物資の調達や施設維持管理を担当している。このように基本的には臨時職員で対応いただいている。花苗の生産に関しては、責任者として臨時職員のうち1名を緑化指導員として採用している。
- ・生産量は年間15万株で、春用、夏秋用で半々である。17年度はパンジーなど24品種50種類を生産した。
- ・配布先は、市内10コミュニティ、保育園、図書館など公共施設、民間福祉施設、警察署など56箇所と朝倉駅、市庁舎前の花壇などである。
- ・一番問題なのは花苗生産コストである。臨時職員で対応しているので16年度は1株あたり47.8円と市場よりかなり安く生産出来ており、今のところ施設云々の問題は出てきていないが、いずれもっと違う方法でやるようになればコストは高くなってしまっただろう。
- ・ほ場ではボランティアの受け入れもしている。地域花壇や公共花壇で必要な花苗づくりを市の花苗生産とは別にやっている。
- ・このようにほ場ではさまざまな取り組みをしているが、奥まったところに施設がある

ので今まで話題になったこともない。こういうものをもっと市民の方にみていただければと思う。

- ・市が行っている花いっぱい運動の取り組みを紹介する。花壇コンクール実施のほか、みどりの教室を年間6回開催している。受講者は20名ほどで、講師をほ場勤務の緑化指導員にお願いし、挿し芽、種まきから植込みまでの花づくり、寄せ植えやハンギングバスケットの実習を行っている。講座修了者には花壇コンクールや花ボランティアへの参加を呼びかけている。
- ・保育園、図書館などを対象にした公共施設緑化研修会も40名ほど集めて年1回開催し、花壇づくりに必要な知識、土づくり、管理方法などの講習を実施している。この講師もほ場勤務の緑化指導員が担当している。公共施設への花苗配布も年2回実施している。17年度は約6万株配布した。
- ・また、市民を対象にコミュニティ緑化研修会を年2回開催し、100名ほどに参加いただいている。コミュニティへの花苗配布も年2回実施しているが、一方的に配布するのではなく、花苗の種類別に注文を取り生産量に応じて配布している。10コミュニティに8万株配布している。
- ・地域の花壇づくりに必要な肥料などを1コミュニティあたり年間35千円の範囲で配布している。市内の15小中学校に対し、花壇づくりに必要な緑化資材を配布している。また、10小学校の卒業記念に苗木を配布しており、従来は市花であるつつじの苗木を配布していたが、団地で庭のないところもあるので昨年から鉢植え用のものを配布することとし好評を博している。そのほか、地域花壇設置補助として限度額6万円で実施しているほか地域緑化施設設置、花ボランティア団体に対する支援も実施している。
- ・市内には花ボランティア団体が30ある。そのうちのひとつに佐布里池コミュニティ花いっぱい会があるが、歴史のある団体で県の表彰も受けている。平成6年に開催された愛知国体の花いっぱい運動で取り組んだ道路に設置したプランターの花づくりがキッカケである。活動としては、地区集会所内での花壇づくり、幹線生活道路にある植樹マス302箇所に花苗を植えたりしている。特徴は、1軒1軒家をまわり各自宅前の植樹マスの水かけ、草取りをやってくれないかというマス花壇管理のオーナー制を発案したことで、非常にすばらしいことである。また、地域の住民との協力関係を重視しコミュニティへの働きかけをしてきた結果、コミュニティの中でひとつの団体として認められるようになり、コミュニティから10万円ほどの補助金を受けるようになった。現在では、小中学校の生徒も参加する機会もあり、子どもたちと一緒に作業している姿はとてもよいものである。そのほか、ガーデニング講座の開催や年3回会報を発行している。
- ・ふたつめは旭南小学校PTAの花壇づくりである。S47年頃から学校の方針として花づくりを通じた教育が行われ、PTAが子どもと一緒に5箇所の花壇づくりをしている。その結果、花壇コンクールで何度も大賞を受賞している。
- ・もうひとつは緑化ボランティア「花景観」である。H7年に朝倉駅から市庁舎までの約300mに花壇づくりを実施した。市の呼びかけで「朝倉駅前の景観を考える会」として発足し、現在は50名ほどの会員が活動している。特徴は、自分たちでほ場種から苗をつくることである。デザインも自分たちで考え、花植え、水遣りまでやる。年間20日ほどのボランティア活動をしている。そのほか、花好きな主婦が集まってグループで花壇づくりをしている旭桃花つぼみ会、地区の中心にあるロータリーの花壇を管理している南粕谷3丁目自治会などがある。
- ・なぜ知多市で花いっぱい運動が地道に継続できたかといえば、ハジカミほ場の存在が大きかったといえる。また、花ボランティアとして活動していた方を臨時職員として

雇用し花苗の生産を行ったため、実質的には市主体ではなく有償ボランティアである市民による花苗生産していたということである。仮に市の職員がこの事業をすると日常の維持管理も難しいし人件費も高く、コスト面で継続困難である。

- ・市民主体の花壇づくりは、うまく組織づくりができたことが大きいし、花の好きな方は次から次へいい花をつくらうという方も多いため現在も続いているのだと思う。また複数の団体でお互いに競い合い、いい意味での相乗効果もあったと思う。
- ・昨年11月頃に中電から電源地域振興指導事業の話聞き、その活用を考えている。電源地域振興指導事業は中部経済産業局の委託事業で民間のシンクタンクの受託による事業であるが、知多市が提案する内容は18年度から2カ年計画で、知多市の花いっぱい運動が抱える問題点・課題を整理・検討し、新しい視点である園芸福祉活動を導入し、指導員養成や活動の普及促進を通じて、地域の人々が生き生きと元気になる地域づくり振興計画を策定できればと考えている。現在、知多半島ではJA知多による知多半島・花半島という活動もやっているため、今後はこのような活動もあわせ、電源地域振興指導事業をうまく活かしながら、ひとつの知多半島全域のモデルとなるような取り組みをしていきたいと思っている。



(4) 質疑応答・感想

- ・愛知県 企画振興部企画課 金沢主査

知多市の取り組みはすごいと思ったが、農政関係にもずっといたのに聞いたことがない。取り組みがうまく広がらないと感じた。ところでボランティアに取り組んでいる人が地域における他のいろいろな役割を担っているとか、いつもニコニコして元気で健康的だとか、そういう効果はあるか。

- ・知多市 勝崎氏

取り組んでいる方は花の知識が豊富な方が多く、花壇コンクールに入賞された方々がメインである。そういう方はやはり目立ちたい、しゃべりたい、教えたいと

いう欲求があるので、各コミュニティで緑化部会をもつところには入って行って話をさせていただいている。こうした人たちをもっと増やして点から面へと広げていき、園芸福祉につなげていきたいというのが最終的な目標である。

・愛知県 企画振興部企画課 金沢主査

美浜町のガーデニングサミットで生産者の方々が関わっていただいたのは非常にいいことだと思った。カブスカウトの話があったが、緑を使って子どもたちと一緒にやることは素晴らしいことである。子どもの教育において命を教える教育が大事だと思っているが、そういう意味で緑がどれぐらい使えるとお思いか。

・猪口氏

小さい頃から植え付けをやった経験がいい意味で気持ちのなかに出てくるといいかなということで取り組んだ。その中で、まずは何でもいいからやってみようという気持ち、自分から進んでひとつ手を出してみようという気持ちを子どものなかでうえつけようと思ってやっただけである。

・名古屋産業大学 伊藤学長

緑化政策がうまくいっている要因のひとつとして直営のハジカミほ場があったからという話があったが、これは当初から花苗づくりのためにつくられたのか、あるいはもっと前から別の活動があってそれが今、花になっているのか。

もうひとつは、花苗生産コスト一株あたり47.8円で市が供給しているのだが、官民のコラボレーションということからすれば公がこういうことをすると民にどういうインパクトがあるのか。行政がやってもこういうことが出来るのだから民も頑張れというように、このほ場を使って何か民の力をつけるような政策を考えているのかどうか。その点で緑化施策における直営ほ場の役割についてお伺いしたい。

・知多市 勝崎氏

むかしはハジカミ池という池であった。最初は池の半分を産業廃棄物の埋立地として使っていた。その上にさらに数mの上質な土をかぶせて平地にした。当初は緑の銀行という家庭でいらぬ木があれば市で貰い受けるという制度がありその置き場であった。そこもいっぱいになってしまい、公園にも木を植えるスペースがなくなり、緑の銀行はやめてしまった。その結果、置き場として利用していた土地が空いたため、国体の機会に朝倉駅から市庁舎まで花を飾ろうということになった際、どうやったら単価を抑えられるかということになり、当時担当課長であった今の助役の発案でボランティアのコンクール常連の方に声をかけて花苗づくりをやってみようということで始めて、試行錯誤しながらもノウハウもたまってきて現在まで続いている。47.8円は人件費、光熱費とかすべて含めた価格を生産株数で割った額であり、これが高いか安いかわくれば価格は出荷時期にも左右されるし一概には言えない。市がつくることによって民間の生産農家を圧迫するのではないかということだが、夏用の苗は6月中旬に出荷し、春用は11月中旬に出荷している。高い苗はその月にはもう市場に出ており、生産農家の方は儲けていると思う。早く出荷すればみなさん欲しいし売れる。市はちょっと遅れて出荷している。また、温室で種まきはするが実際には外に出して育てている。なぜかといえば陽の光にあてて強い苗にしたいからであり指向も違う。

・犬山市 農林商工課 日比野氏

花と緑をいかに広めていくかということに興味深く聞かせてもらった。犬山市では知多市のようなほ場がないので、いかに生産者の方に頑張ってもらって近隣の方たちに買っていただくかということを考えている。今後の課題として生産者の方と地域の人とどういうふうにつながりを持たせていくかということを考えている。犬山市でも花のまちづくりコンテストをしているが、宣伝も上手くな

いため参加者も少なく、今回の話を参考にしていきたいと思う。

・犬山市 企画調整課 日比野氏

行政は全体の奉仕者ということで住民の生活のための施策をとらねばならないが、そうした観点から緑化施策の一番大きな効果は何か。

また犬山市でもコミュニティ単位での事業を考えており参考までにコミュニティの現状についてお伺いしたい。

・美浜町建設部都市計画課 小島主査

まちづくり推進委員会では平花壇づくりがほとんどあったが、今回のサミットに向けてガーデニングの免許を持っているマスターの方に入ってもらい、どういう飾り付けが人目を引くかということの説明いただき、花の苗の数をあまり使わずに飾り付けをする技術などレベルアップがかなり図られた。そうした意味で、今までと違う飾り付け、人が見て綺麗だと感じる飾り付けの知識がかなり向上した。花のまちづくりボランティアもハンギングマスターの指導を受けながら飾り付けとか植え替え作業をやっていただいた。一緒にやることにより花の扱い方、木の扱い方について、その場で質問しながら実践形式でやることが出来た。

・知多市 勝崎氏

効果としては緑化技術の向上、ボランティア間の情報交換が図れることである。また、まちを歩いていて花が市内に増えたと実感している。花壇コンクールでは共同花壇の部の応募が年々増えており、各コミュニティで花を育てる方が増えてきたと実感としている。

また市庁舎前で水遣りをしていると、歩いている人が綺麗ですねと笑って声をかけてくれる。やはり笑って気持ちよくなるのが最終的な効果だと思う。土木出身であり、以前は邪魔な木や花は切っ飛ばすという感覚であったが、こういう立場になってみて花は水をやらないと枯れてしまうがきちんと接すれば応えてくれる。そういう点で人への癒し効果がある。

コミュニティは10あり、市内全域にわたり学校区単位でやっている。花苗は10コミュニティに配布しているが、レベル差があり全体の底上げが課題になっている。

・知多市建設部花と緑の推進課 加藤課長

行政はコミュニティ組織を活用しようとする。福祉とか環境とかつくるがなぜか緑化はない。その中であるコミュニティで花いっぱい運動が認知されるようになったのは花苗を見ることによって地域として何かしなければいけないのではということが自然に出てきたのではないかと思う。行政がコミュニティに緑化部会をもうければ全地域にある程度広がっていくと思うが、花というのは日常管理をしなければいけないので強制的に緑化部会をつくったとしても義務的になりがちで運動の展開も難しいと思う。地域にはボランティアが結構いるので、それとの連携を考えていくことが大事である。そのため知多市は今まで多くの事業を展開してきた素地は十分あり、それを地域がどうみることが今後の課題と思っている。

・名古屋産業大学 伊藤学長

今の質問は非常にいい質問である。花を植えて一体市民全体のしあわせにつながるのかということが行政の思いだろう。この会も当初園芸福祉ということでスタートしたが、園芸というと農林課、福祉だと福祉課といったことになり世界が狭い。そうではなく健康都市づくりのために花と緑を活かす勉強会であり、健康といった時に教育委員会や都市計画、すべての部局が関われる生活課題を花と緑を活かした地域づくりの中で出来ないか、そのためにどうしたらいいかをやっ

ているので、こうしたことが犬山市の都市形成において、どの部局がどんなふうに関われるのかということを考えていてもらいたい。

・愛知県環境部環境政策課 福田主事

県民の方への環境教育をやっているが、指導者を育成していくうえでボランティアの協力は欠かせない。行政の立場としてボランティアの方とうまくおつき合います方法、出来る範囲でうまく活動していただける秘訣みたいなものがあれば教えていただきたい。

・名古屋産業大学 伊藤学長

むずかしい質問だが、環境教育も魚釣りと一緒に、どういうおいしい餌をみせて、それを食べたがっている群に放り込むか、これが行政マンとしての腕の見せ所だと思う。

・知多市建設部花と緑の推進課 加藤課長

いい関係とはお互いに物事を言える関係だと思う。行政からすると苦情もなく上手にやってくれるのがいいと思いがちだが、それだとうまく育っていかない。相手方は自分の視点で意見を言い、行政も許容範囲があり出来ませんという話に結構なる。そうすると物別れになったり、話も進展しない。そこでやはり作業する場合には一緒に入ってやるとか、お金は出ないにしても何かこの職員は違うというところをみてもらうと信頼関係につながるのではないかと思う。

・東海市 花と緑の推進課 高井氏

東海市の各コミュニティでは緑化推進委員が1名ずついる。昨年、全国花のまちづくり愛知大会を県と一緒にやらせてもらったが、各小学校区でプランターづくりをした時に指導員として推進員を使わせてもらった。それを契機に下火にならないよう努力はしているが、大会が終わってしまうとあるコミュニティではこれで終わり、別のコミュニティではこれからやっというところもあり駆け引きが非常に難しい。行政がやれと言うと反発してしまうし、金や物を出せということになってしまう。いかに金を出さずに住民の方から盛り上がらせるかが行政のひとつの手腕と思うが、いま苦労しているところでもある。

・愛知県 園芸農産課 山口主査

愛知県と名古屋市が絡んでフラワードームを17日から開催する。今回7回目であるが、15万人程度の入場が見込まれるようになった。そうした中で、いろいろな花に関する取り組み事例の発表の場にもなればと考えている。

全国10市町がガーデニングサミットをやっているということだが、この集まりのきっかけは何か。また他の市町から参考となる情報が入ってくると思うが、何かいい事例があれば教えていただきたい。

・美浜町建設部都市計画課 小島主査

現在は10市町であるが当初は17市町であった。平成の大合併で10になった。美浜町は3年前に兵庫県宝塚市で開催された第2回から参加している。もともとは兵庫県宝塚市と北海道由仁町の首長の話し合いをきっかけに立ち上げた組織と聞いている。ガーデニングサミットは持ち回りになっている。開催するにあたり、各地区住民の方にも声をかけ一緒に参加しており、交換交流会も実施している。その場で情報交換したり親睦を深められている。

・園芸福祉士 横井氏

協働という言葉があったが、捉え方がみなさん違うと思う。協働は本来、行政主導のインフラ整備に対し住民意見を採り入れてやるということで、これはコストパフォーマンスの世界だと思うが、今の愛知県知事も費用対効果ということで効果がなければすぐ足を切ってしまう。それはコストパフォーマンスではなく予

算の削減という一方的な話ではないかと思う。さきほどパンジーの単価が47円という話があり高いか安いという話だったが、たぶん非常に安いと思う。結局、量販店でパンジーを30円で売っているが、よくあるパターンとしては4ヶ月かかるのを温室の中で温めてやることによって2ヶ月で出来る、それによって温室の中の回転数を上げることによってコストパフォーマンスを図る。ただ知多市の例だと非常にいい苗なので結局それを植えてもたぶん保つだろうが、温室で育てた物は所詮温室育ちなのですぐ枯れてしまう。

提案したいのは、協働の中でボランティアという位置づけは非常に重要であるものの、自己実現のボランティアの場合は無償でもよいが、最終的には有償になる必要がある。そうなった時にどう有償化を評価するかは非常に難しい。ただ言えることはパンジー47円に対し市場価格がどうなのかという部分で、それに対しアドバンテージがあれば、それは関わった人の評価にあたると思う。いいものは評価して、市場価格の利鞘分をボランティアに還元するとか前向きな建設的な発想をすべき時期にきたのではないかと思う。コストパフォーマンスをした人は評価してあげるべきで、費用対効果とはそういうもので、効果がないとぼささり切り捨てるという話は情けないと思う。

・中部電力(株)環境部 加藤主任

本日のいろいろな話を聞いて、資料にない部分での苦労も多いと思うが、行政の出来る範囲は限られていると思うし、そうした中でコミュニティとかボランティアの方と協力してこれだけの活動をやっていることに非常に感心した。

・常滑市 企画課 石井副主幹

花と緑を使って一緒にまちづくりをしていく中で一定の役割分担、連携しながらということ、協働という言葉で表現しても間違いではないと思う。常滑市でも美浜町や知多市と同じような取り組みはしているが、市民への広がりとか層の厚さで劣っていると感じた。特に美浜町の話では、きっかけを行政がつくって、サミットで一丸となって花飾りをし、その後の自主的な活動につなげていっているし、美浜緑苑では地区計画をうまく誘導し今では制度が馴染んで各家庭が自発的に花飾りや庭づくりをされている。非常につながりのある取り組みである。知多市もほ場で花を供給し、それをうまく市民の方に配布し、まち全体で花づくりが進んでいるということで大変参考になった。

前回、花のいっぱい効用を総合的に行政で進めることが出来ないかという検討課題を持った。知多市の話で、総合計画の将来都市像という最重要テーマで緑園都市を掲げていたが、そうすると行政は組織をそのようにつくらざるを得ないし、多面的な取り組みをうまく展開していくことに出来るというヒントをいただいた。

・日本福祉大学 研究・教育連携部社会連携課 伊藤氏

これから少子高齢化で女性も社会進出するようになると、花のいろいろな効用はわかるが、自分の家でどうやったらいいかノウハウもないし時間もないと思う。地域の中で花の好きな人や教えたい人から自分の家を安価で飾ってもらおうというボランティアがあれば自分も利用して家を綺麗にすることが出来るし、子どもたちにとっても花にふれあう機会が増える。小学校区での花の取り組みもいいが、家庭の中に花とのふれあいの場を広げていけば子どもたちの情操教育にもよいと思う。

・環境創造センター 児玉専務理事

今日の話聞いて、行政のパフォーマンス評価を段階的にきちんと行い、ステップアップしていかないとある段階で止まったり逆に下降していくこ

とになる。そういう意味でどういう指標を持ちどう評価をしていくかという業務管理になろうが、その辺を少しお考えになると発展につながると思う。

また、行政と市民の協働ということであったが、市民の立場の話が少なかった。協働という面で、今後、市民の声をもっとお聞かせいただく機会があればありがたい。

・名古屋産業大学 伊藤学長

行政はいつも地域のリーダーシップを発揮されてこられたが、今日のテーマの行政と市民のコラボレーションはまだ日本では完成形には至っていない。花を好きな人に悪い人はいないということもあり、一番コラボレーションという面ではしやすいテーマだと思う。もっと難しい行政テーマをコラボレートしていかなければならないが、市民の側にもひとくくりで市民というにはあまりに多様な主体を抱えており、多様な主体間の多様な連携というテーマもある。今日のたくさんのご意見の中には宿題を提起された方もいるし、これらを受け止めながらこの勉強会をまだまだ続けていきたいと思う。

(5) 事務局連絡

次回勉強会についてですが、環境省の炭谷事務次官がブルーボネットでやっている園芸福祉活動を一度見てみたいという話があり、4月で調整しているところです。出来ればこういう勉強会の場で事務次官とも意見交換したいと思っており、現在話をしている最中なので日程についてはもう少しお待ちいただきたいと思えます。よりおもしろい議論が出来るのではと思っているので宜しく願いいたします。

4 配付資料

資料1 あいち花と緑を活かした健康増進地域づくりフォーラム設立準備会参加者リスト

資料2 報告1説明資料

資料3 報告2説明資料

資料4 フラワードームチラシ

以 上